

稲葉氏の臼杵城

一 稲葉氏以前の経営

高橋長一

大友宗麟が府内から移つた丹生島城は古地図もなく断片的な資料しか得られないので推測の域を出ないが、純粹の海島をそのまゝ利用した極めて簡単なものであつたと思う。しかし本丸と西の丸とは空堀をへだてて構築された事はほぼ確實であつた様であるが、それも石垣ではなく土の塁壕であつた。

従つて居館こそかなり整つたものと思はれるが、櫓などは現在見る様なものでなくもつと素朴な建築であつた。宗麟が今の西の丸に居たか、本丸に居たかは明らかでないが、安定しなかつた時代を考え合せるとせまいが本丸に居住したと見る方が妥当な様である。城は今の古橋口を大手とし、搦手門は卯寅口に設け、臼杵湾に直接開いていた。この搦手は稲葉氏になつても使用された。福原氏、太田氏の時代は何の資料もないので何とも推断は下されないが、恐らくは城櫓はかなり整理されたのではないかと思はれる。それは福原直高も、太田一吉も共に秀吉の側近として、大阪城や伏見桃山城でその大半を過し、秀吉によつてはじめて臼杵城主に任命された人々であるから、はじめての城主として大いに城の経営をしたものと推測される。しかし在城期間も短く共に徳川氏から亡されたので資料は何一つ残っていない。

二 貞通、典通の経営

関ヶ原の役後、美濃の郡上八幡城から転封された稲葉貞通は子の典通と共に太田と中川によつてこうむつた戦禍のあとの臼杵城に入封したので恐らくは新規の城廓経営の心意気で改修をはじめたであろう。しかも天下は徳川氏によつて完全に掌握されて政局の安定の見通しも立つた頃とて、当然と思う。

貞通は子の典通と協議し、郡上八幡築城の経験をこの臼杵城に生かして着手している。稲葉家譜によると、貞通は大規模

な土木工事を起して城と共に城下町の整理や防衛工事に取組んでいる。

今公園になつてゐる丹生島城は家譜によると大畧して二つに区分出来る、本丸は土塁を石築にしたことが最大の工事の様である。今本丸の入口の右側の高い石垣はこの当時の本丸防備の堅固さを物語つてゐる。左側には同様の石垣に折をつけ乍ら勤皇白杵隊碑のある天守台まで続いてゐた。この石垣は後に崩されて空堀は庭園化された。話によると石垣の石は佐賀関精練所の出来る時に売り払われてしまつたとのこと、今残つていたら本丸の規模もうかがわれたと、残念である。

古地図によると、本丸は藩主の居館があり、天守も三重ながら丹生島城の象徴としてそびえ附櫓もあり堂々と海水に映えていた。しかし、この天守は家譜には後年に改修などでは散見するが、造営のことはあらわれてない。恐らく稲葉氏以前に作られたものであろう。それが宗麟時代か、福原、太田氏が明確ではないが想像するなら近代的な城廓の营造をしたであろう福原、太田両氏のうちではあるまいか。

猶、本丸への通路も今は西の丸から直接に続いてゐるが、家譜によると、西の丸の今の畧櫓（時鐘櫓）から西の丸石垣に添つて、（今の西の丸上り口はない）北に廻り、今橋口を経て、北の帯曲輪を通り、空堀の中から本丸対岸の西の丸に上り城門に通じたと記してある。即ち今の西の丸の腰を西から北に半周して本丸に達することになる。これを貞通が今の如く畧櫓の側から石段をつけて直接に上る様にしたのである。

西の丸は三代一通の代になつて本丸が手狭との理由から引移つたもので、これは全国的に平和を迎え、本丸等の防禦本位の廓から広い、居住に便利な廓に移つたものである。姫路城でも、池田氏が備前丸から下りたのと全く理由である。

白杵図書館には古地図が数多いが只一つ異色の地図がある。それは今橋口（祇園洲の北）が大手と記されている。私たちは古掘口が大手とのみ考へていたので、此の古地図は誤りではないかと疑つて見たが、これは貞通の白杵城大改築の際に本丸への道の不便さと防備との両面から、宗麟築城以来の大手口（古橋）から祇園洲口からの今橋口を作り、これを大手に改めたのである。それは古橋口は銃砲の発達に伴つて戦時に行動が銃火に妨げられると考へ三の丸（祇園洲）を設け、周囲に高さ二間

の石垣の上に土居を築立てて平時は重臣等の居所にした時、三の丸大手を構え、更に古橋口を左にまわつて喰違いの石垣の間を抜け今橋口から城に登る。この口は三つの城門をくぐつて西の丸に上る様になつてゐるが、そこから藩主の居館の本丸に入る。後にはこれも不便であり、居館も亦西の丸の西半分に移り、しかも世も太平となつた為に、古橋口を亦大手に直して藩主館えの正式の道、即ち大手口に直したものである、これが現在も残るあぶみ坂である。猶、今橋口が大手であつた名残として城内第一の高石垣である現在招魂社の北の櫓を着見櫓（月見櫓）と呼ばれてゐたことでも立証出来る。この櫓は四間程の石垣の最先端に設けられ、今橋口の橋から第一の城門を監視し、眞下の第二門、それから上手で西の丸の入口の第三の門まで監視される最重要な櫓で敵軍な登城口にふさわしい櫓であつた。かりに着見櫓でなく月見櫓としたら白杵城北の中央部で月を見るにはまことに不適當な櫓である。

この古大手の今橋口も文明開化の嵐にあたり三つの城門とそれに伴う石垣は跡かたもなく崩され、今では広い自動車道に變つてしまひただ右側の高石垣のみが古を語つてゐる。

古橋口は今橋口に代つてまた大手に返り咲いたのは前述の如く藩主が西の丸に移つてからである。今でも残る層々と重なる石垣や崖その間を縫つて曲折して上る道は平山城形式の代表として県下にその類を見ない。古い石橋を渡つて第一の城門に入りやがて岩を掘つて通したせまい道が左折して又岩壁につきあたる。そこには二坪程のくつろぎがあるが、こゝは槍場と言つて道を上つてくる敵に長槍で相對する為の処である。こゝをすぎると又せまい道が石垣と石壁との間を上つてゐる。稲葉氏入城の際に取り除いた揚簀戸のあつた場所で、こゝを抜けると広い道になる。石段を上ると城門があつたが、これは後に廃されてゐる。突当りが塁櫓、それから石段。又左折して西の丸下の広い道となる。下の段とこの段が広いのは城が攻撃された時の防禦線をしく上に多数の兵士をおく為である。高い石段を上ると西の丸の城門で「くるがね門」と呼ばれた。恐らく鉄片を張りつけた門であろう。城門の渡櫓は左右に塀をのばして右は城中最大の勢樓櫓に到る。これは古写真にもあるが、四間半に五間半の二層の大櫓で城下からは下の塁櫓と共に城主の威を示すごとく高さ八間の崖の上に設けられていた。平時は重臣の會議所

として用いられていた。この櫓の位置が城外の原山台即ち多福寺から一番近い所で、又城内をも見下ろされるので石垣も高くし、全体に丈夫にこしらへられている。明治十年の役には原山台から城内を射たれて臼杵士族隊が城の守をすた原因になった最も弱い地点であった。しかし宗麟時代の火炮では射程外にあつたので丹生島城は安泰であつた様である。関ヶ原の時の中川氏が来攻した時は原山台のも一つ西の福良台に陣して攻めたが城は堅固に持ちこたえた。臼杵城は火炮の発達に伴つて次第に城としての価値を失つて来た様である。祇園洲は三の丸として諸役所と重臣の邸宅とで占められていた。海中に高さ二間の石垣、その上に土居を築いて上に松を植えてかためていた。十年の役に堀川をへだてて敵が屋根上から射つて来た時、この土居の松かげから一発で指揮官を射つてたおした話も残っている。即ち十年の役には平地の三の丸などは却つて堅固に持ち耐えていたが本城の西の丸を早く原山台から射たれて城の守を失つた。これも城の歴史として記録しておきたい一つであつた。

古地図によると本丸での櫓や城門は、天守（三層）二層櫓六、城門三（内渡櫓一）西の丸では二層櫓八、単層四、城門四（渡櫓のあるもの二）又廃した城門二、又三の丸では大手の渡櫓のある大城門と北浦門との二つ、櫓は二層四、単層一で、海中の冷城として海水に映じていた。宗麟以来明治の初年まで戦火をうける事三度、豊後の亡藩の中でも比較的によくまとまつた城であり、現在でもよく遺構をうかがえる城であり、又築城的に見ても価値がある城として県指定の史跡として残されている。（臼杵市芝尾）